

日本ラテンアメリカ学会

会 報

No. 2

1980年11月1日

第2号 目 次

1. 理事会報告
2. 学術・文化情報
3. 会員活動報告
4. 55年度科研費
5. 事務局から

日本学術会議第12期会員選挙
ラテンアメリカ研究センターめぐり

1. 第3回理事会報告

1980年10月4日、9名の理事出席のもとに開催され、理事長より事務局活動報告を受けた後、研究会・予算修正・来年度大会等について審議がなされた。

○第2回理事会以降の事務局の主要な活動は以下の通りである。1) 会報第一号の編集・発送、2) 会員募集(一般会員・賛助会員中心)、3) 国内の研究機関、関係官庁、ラテンアメリカ・欧米のラテンアメリカ研究機関等へのあいさつ状送付、4) ベネズエラ作家協会会長ラモン・ウルダネタ氏との懇談会開催、5) 会費納入依頼書送付、6) 会員カード作成、7) ラテンアメリカ関係の著書・論文抜刷りの収集・整理・カードカタログ作成。審議事項は以下の通りである。

- i) 研究会は、東日本部会を、松下洋・松下マルタ両氏を報告者として、11月15日に、西日本部会を、友枝啓泰・吉田秀太郎・原田金一郎の各氏を報告者として12月6日に開催する。また、来年度大会前にもう一度(1981年3月頃)研究会を開催する予定である旨、石井・山崎両理事より提案があり、承認された。
- ii) 第2回理事会で未定であった3名と、新たに入会を希望した12名について、書類を検討した結果、14名の入会を承認。残り1名については、書類不備のため、調査の上、次回理事会で検討することにした。また入会申込みのあった賛助

会員3社の入会を承認した。賛助会員・準会員の募集を一層積極的に続けることを決定した。

- iii) 理事長より、印刷費・通信費の予算増額を中心とした予算修正案(予備費を含め総額150万円)が出され、承認された。来年度の大会において、参加費を徴収するかどうかを、次回理事会開催時点での財政状況を見て、決定することにした。
- iv) 来年度大会は、1981年6月6日(土)、7日(日)、アジア経済研究所で開催することを決定した。大会での研究報告の希望(演題及び専門分野)と統一テーマの希望について、会員の意見をアンケート形式で問うこと、大会の具体的編成は、その結果を踏まえて、次回理事会で検討することを決定した。
- v) 会報2号は、研究会案内、第三回理事会報告、大会報告に関するアンケート、学界報告等を中心に編集することになった。年報第1号については、野谷・国本両理事が、編集委員会の構成及び第1号の内容について原案を作成し、それを次回理事会で検討することを決定した。
- vi) 全国的な研究連絡を目的とする科研費の申請について、理事長及び山崎・アンドラーデ両理事を中心として検討することにした。

日本学術会議第12期会員選挙

来る11月25日に、日本学術会議第12期会員の選挙がおこなわれる。言うまでもなく、本学会も日本学術会議の動静に十分な注意を払う必要がある。ラテンアメリカの地域研究の促進や、関連語学教育の充実などについて、将来学会が学術会議に対して要請や勧告をおこなう機会も来るであろう。本学会会員で、学術会議の有権者名簿に未登録の方々にはできるだけ早く登録の手続きを取られるようお願いしたい。

ラテンアメリカ研究センターめぐり (1)

—上智大学イペロアメリカ研究所—

上智大学イペロアメリカ研究所は、わが国における数少ないラテンアメリカ地域研究・教育センターの一つである。同研究所は、ラテンアメリカ地域への関心が高まりつつあった1964年に日本とラテンアメリカの関係を学問的水準で研究するという目的をかねて、上智大学内で独立した機関として発足した。爾来、教育および研究の両分野において積極的な活動をすすめてきており、同研究所がこれまでに果たしてきた役割および今後の活動に対する期待は大きい。同研究所の主な活動と特色は以下の通りである。

○図書室（専従司書一名）

ラテンアメリカ地域に関する資料文献図書約2万2,000冊および遂次刊行物約250種（80年9月現在）。特別文庫として「井沢文庫」と「南米文庫」が存在する。前者はわが国のイペリア・ラテンアメリカ研究の先駆者故井沢実氏が寄贈した約3,400冊から成る。後者は75年に同研究所がコロンビアのパライヤ書店から一括購入した約5,500冊から成るコレクションで、ラテンアメリカ地域の独立戦争、コロンビアの植民地時代およびアマゾン川発見に関する貴重本を含んでいる。大学内の総合図書館から独立しているこのラテンアメリカ専門図書室は学外者に対しても開放されており、図書の絶対的不足に悩む都内大学の学生達にも広く利用されていることは特筆に値しよう。学外の利用者に対しては閲覧票が発行される（年間学生500円 一般1,000円）。

○新聞記事切抜き資料の分類・保存の作業

70年以来日本の新聞（朝日・毎日・読売・日経・日経産業・Japan Times）のラテンアメリカに関する記事を切抜いて分類する作業を続けている。1年以上遡る切抜きはマイクロフィルム化されている。

○研究活動

現在同研究所内で開かれている研究会として次のものがある。(1)「ラテンアメリカの社会階級研究会」(2)「ラテンアメリカにおけるカトリック教会の役割研究会」(3)「メキシコ革命研究会」なお、(1)は今年度日本私学振興

財団から学術研究助成金を受けている。

○教育

上智大学外国語学部で開講されているラテンアメリカ関係講義を受講し必要単位を満たした学生に対して「特別修了書」を発行している。必要単位は、入門コース（4単位）・人文系および社会科学系に属するコース（24単位）・卒論（6単位）の合計34単位である。79年度には1名が取得、80年度は19名の取得が予定されている。

○出版活動

いくつかある出版シリーズの中で、『ラテンアメリカ文献目録』は、広く評価されている。1974年以降わが国で発表されたラテンアメリカに関する書物（翻訳を含む）および雑誌論文を網羅している。79年7月に第1号が発刊された『イペロアメリカ研究』は研究および情報誌の性格を持ち、年2回発行されている。

○その他の活動

内外のラテンアメリカ研究者およびラテンアメリカ諸国から文化人、政治・経済の専門家を招聘して、公開講演会や懇談会を開催してきた。

○研究所所員

グスターボ・アンドラーデ教授（政治学）

研究所所長

水野一教授（経済学） 事務局長

ハイメ・フェルナンデス講師（文学）

神吉敬三教授（美術史）

小林一宏教授（歴史学）

V. ローシャイター教授（文化人類学）

佐野泰彦教授（歴史学）

清水憲男講師（文学）

高山智博教授（文化人類学）

（研究員） 辻 豊治（経済史）

（準所員） 緒田原涓一教授（経済学）

中川和彦・成城大学教授（法学）

（名誉所員） 大来佐武郎氏

安藤龍一氏

エンリケ・アユカル教授

（国本伊代記）

2. 学術・文化情報

i) ラテンアメリカ政経学会全国大会

1980年11月8-9日, アジア経済研究所 国際会議場(東京都新宿区市ケ谷本村町42)で開催された。テーマおよび報告者は次の通りである。

- 11月8日(土)午後2時-5時
 - 1. メキシコ革命と銀行改革 青木芳夫(奈良大学)
 - 2. 「多国籍企業」へのラテンアメリカ側の論理 山崎俊夫(大阪外国語大学)
 - 3. ペルー近代に関する諸問題 辻豊治
- 11月9日(日)午前9時-午後5時
 - 1. アルゼンチン経済とインフレーション 小林志郎(日本貿易振興会)
 - 2. アジア系移住者のラミ諸国に与えている文化的影響 西俣昭雄(亜細亜大学)
 - 3. ニカラグアの政治・経済 原田金一郎(大阪経済法科大学)
 - 4. 共通論題「国際エネルギー危機とラテンアメリカの政治・経済」 今井圭子(アジア経済研究所)

ii) 筑波大学ラテンアメリカ特別プロジェクト年次シンポジウム「ブラジルの自然と社会 —ノルデステを中心にして—」

11月1日, 2日同大の公開日の機会に行われた。「北東部開発の歴史と現状」「砂漠化のプロセス」「開発と病理」「開発のジレンマ」「ブラジルの日系人社会」「学際的地域研究のあり方」などの分科会が開かれた。同大内外の研究者, ブラジルの経済地理学者 マヌエル・コレイア・デ・アンドラーデなどが参加した。特別プロジェクトは, 1期5年で研究を行う制度で, 今年は3年目にあたる。

iii) 中央アンデス・シンポジウムの開催

「中央アンデスの人間と環境」と題するシンポジウムが, 国立民族学博物館, 民族学振興会(千里事務局)の主催, 谷口財団の後援で12月20-25日に開かれる。会場は国立民族学博物館。日本, ペルー, アメリカの民族学者14人が参加し, 中央アンデスの特異な環境への適応と文化形成の問題がスペイン語で討議される予定。

v) 上智大学イベロアメリカ研の講演会

11, 12月の予定は下記の通り。

○ 「シモン・ボリバルについて」 José Salcedo-Bastardo (前ベネズエラ文部大臣)

11月21日(金) 18:00-20:00
上智大学四谷キャンパス 7号館14階 特別会議室

○ 「ラテンアメリカの最近の経済問題」

Dr. Victor Urquidí
12月5日(金) 18:00-20:00
上智大学四谷キャンパス 7号館14階 特別会議室

v) LASAの年次大会

LASA(Latin American Studies Association)の年次大会が, 去る10月17日から19日まで3日間, インディアナ州ブルーミントンのインディアナ大学で開催された。メサ=ラゴ教授からの通信によれば, 80以上のセッションが設けられ, 多くの報告がおこなわれたという。

vi) AHILA総会の通知

AHILA(Asociación de Historiadores Latinoamericanistas Europeos)の第6回大会が, 1981年5月25日から28日まで4日間, スエデンのストックホルムで開催される旨, 同会会長 Magnus Mörner教授から連絡があった。この大会の研究テーマは, 「ラテンアメリカの工業化, 組合形成過程における資本, 企業家, 労働者」である。Mörner教授は, 本学会会員が同大会に出席することを希望されている。AHILAに関してさらに詳しい情報が必要な方は, 下記に連絡されたい。

Dr. John Everaert

Vogelenzang 21, B-9620 Zottegem-Grotenberg, BELGICA

vii) 第26回SALALM大会

Seminar on the Acquisition of Latin American Materialsは, 1981年4月1-4日にかけて米国ニュー・オーリンズにあるTulane大学で大会を開催する。問い合わせに関する宛先等は, 学会事務局へ。

viii) その他

○ 副王史料集の完結

1976年以来 BAEで刊行されていた

「アメリカにおけるスペイン副王関係史料集」が、今年になってからペルーの第7巻を出して完結した。メキシコ関係5巻、ペルー関係7巻合計12巻の膨大な史料集であり、16世紀から18世紀はじめまでのラテンアメリカ植民地時代の研究には不可欠のものである。編者はルイス・ハンク教授。ハンク教授が、1964年バルセロナの国際アメリカニスト会議の一セッションで同史料の編集・出版を提案してから、16年ぶりに完成した大事業である。原タイトルは、Los virreyes españoles en América durante el gobierno de la Casa de Austria である。

○天野芳太郎氏の古代アンデス図案集出版

ペルー、リマ市在住の天野芳太郎氏は、古代アンデス文明の遺物を集めた博物館の設立者として有名だが、同氏が長年にわたって研究してきた、古代アンデスの布や土器のさまざまな文様、図案に関する図録が、Disenños precolombinos del Perú の表題のもとに同博物館によって去る9月に刊行された。多くの図案が、鳥、魚、動植物、天体、幾何学文等の項目別に分類され、考古学の研究者や図案家にとってきわめて有益な本である。入手を希望される方は、下記住所に連絡されたい。

Museo Amano, Calle Retiro 160
Lima 18, Perú

○ナワトル語原典の邦訳

ベルナルディーノ・デ・サアグンの『ヌエバ・エスパニャ概史』の第12巻が、ナワトル語のテキストからはじめて邦訳された。第12巻はエスパニャ人によるメシカ人征服を扱っていて、被征服者の視点をうかがうことのできる貴重な史料として知られており、西語テキストや英訳もあるが、今度ナワトル語研究者の小池佑二氏によって原典から直接邦訳されたことは意義ぶかい。大航海時代叢書第Ⅱ期第12巻『征服者と新世界』5～112ページに、「メシコの戦争」として収められている。去る10月6日に刊行された。

○オテクパタ遺跡の発見

中央アンデス東部地方で遺跡踏査をつづけていた関野吉晴氏が、クスコ東方のパンチャコヤ地方オテクパタで、新しい大規模な遺跡

群を発見した。石造の遺構が多数見つかり、またまぎれもないクスコ・スタイルの土器片が出土しているので、インカ期に使われていたことはまちがいない。高原民族のインカは、アンデス東方の低地が苦手であり進出しなかった、というのが通説だが、16世紀の記録にはインカ族のモンタニャ地方侵入に関する記述がけっして少ないことを考え合わせると、関野氏の今回の発見はひじょうな重要性を持つように思われる。すでに朝日新聞、アサヒグラフで紹介がおこなわれたが、学会事務局では近く関野氏にインタビューをおこない、会報次号に記事をのせる予定である。

ix) 訪日者リスト

- Roberto Flores (コスタリカ) コスタリカ国立大学教授 (音楽) 国際交流基金 80年1月-7月
- Francisco Ariza (コロンビア) 画家 国際交流基金 80年4月-9月
- Jorge Shizuru (メキシコ) メキシコ国立自治大学建築学部教授 国際交流基金 80年4月-81年3月
- Roberto Esquenazi Mayo (米国) ネブラスカ大学ラテンアメリカおよび国際関係研究所所長 80年7月上旬
- Jeny Wakizaka (ブラジル) サンパウロ大学日本文化研究所研究員 国際交流基金 80年8月-81年3月
- Mariano Baptista (ボリビア) Ultima Hora 紙社主兼編集長 外務省 10月6-20日
- Claudio Chagas Freitas (ブラジル) O Dia 紙社長 外務省 10月15-29日
- P. H. dos Dantos Amorin (ブラジル) Jornal do Brasil 紙総編集部長 外務省 11月13-27日
- N. D. Scalzo (ブラジル) O Estado de São Paulo 紙編集部長 外務省 11月8-22日
- Enrique Velasco Ibarra (メキシコ) グアナフアト州知事 外務省 11月中旬

3. 会員活動報告

- i) ベネズエラ作家協会会長との懇談会
ベネズエラ大使館よりの申し入れに基づき、

8月22日、本郷学士会館において、ベネズエラ作家協会会長ラモン・ウルダネタ氏と文学文化関係学会員との懇談会が開かれた。夏休み中でもあり、学会側参加者は数名にとどまったが、当日は、午後2時すぎから1時間、ウルダネタ氏がベネズエラの政治・経済史と文化的発展の関係について語り、その後4時まで、参加者との間に活発な質疑応答があった。

ii) メキシコにおける二つの国際会議に出席して 原田金一郎

1. 第6回国際経済学者会議——本年8月4日から9日まで、メキシコ市にて国際経済学者会議が「人的資源、雇用および開発」というテーマのもとに開かれた。国際経済学者協会会長の都留重人氏をはじめとして、ノーベル経済学賞を受賞したサミュエルソン、ブレビッシュ、カルドア、アミンなどの国際的な著名人を含めて参加者は約3千人にのぼったといわれている。おそらく第三世界で同会議が開かれたのははじめてということもあって、主催国メキシコの力の入れようは大変なものであった。たとえば、8月9日の閉会式は、総大理石造りの壮麗な芸術宮殿（パラシオ・デ・ベジャス・アルテス）で開かれたが、ロベス・ポルティージョ大統領以下閣僚メンバーの出席のもとにはなやかにおこなわれた。

会議でめだったことは、やはり「第三世界」色が強かったことで、たとえば、閉会式で都留氏が「現在われわれが直面している最大の問題は、南北間の経済格差の増大と先進諸国のスタグフレーションの二つだ」とのべると、翌日の新聞紙上ではこれが「インフレーションによって深刻化する南北間の格差」という見出しになっていた（！）

そして、むろんラテンアメリカ色の強かったこともあげられる。6つの部会のうち、6番目の「ラテンアメリカにおける雇用と開発」（議長ビクトル・ウルキディ コレヒオ・デ・メヒコ学長で国際経済学者協会の新会長となった）をテーマとする部会に参加者が集中し、（言語の問題もあろうが）他部会との差異が大きいことに驚かざるをえなかった。

そして、先進諸国にたいする抗議・批判の姿勢が強かったことも印象的である。「第三

世界の盟主」たることを自負するメキシコとしては、新国際経済秩序（NIEO）やそれにもとづき集団の自力更生のためにつくられたラテンアメリカ経済機構（SELA）に見られるような「南」諸国の立場を代表して、「搾取」や「従属」について触れざるをえないのだろう。こういったポリティカルな立場からしても経済学は重要なツールと見えて、閉会宣言においてポルティージョ大統領が、「経済学とはミネルヴァのふくろうのようなものだ」という賛辞をのべたことが耳に残っている。

2. 第5回農村社会学国際会議——同じく8月7日から12日まで、メキシコ市で農村社会学国際会議が開催された。（この国際会議ラッシュこそ、第三世界の雄たらくとするメキシコの自負と、その石油増産による経済力を示すものにはかならない。）

だが、この学会は実にユニークなものだった。たとえば、部会は3種に分かれていて、ふつりの報告・討論によるもの、統一テーマのもとにペーパーを提出してその要点のみを報告するペーパー・セッション、あるテーマをめぐって研究者と実践家（農民運動家、協同組合活動家など）がフリーにしゃべるものがある。そして週末には、14種のツアーが用意されていて、一般旅行者には不可能なエヒードや協同組合を訪問させる——といったぐあいである。

この、実践家が参加するという点がミソであり、「私たちに利用価値のない研究など必要ない」などと、なかなか耳の痛いことをズバズバいっていた。また、白い帽子をかぶり皮サンダル（ワラッチェ）をはいた農民や、老人・女・子供までがゾロゾロと演壇に上がって自分たちの窮状を訴える共同体成員などに、当初はとまどいを覚えたが、彼らがしめくりに叫ぶ「ビバ、エミリアノ・サバタ！」に新鮮な感動を受けた。

こうなるとラテンアメリカ色どころか、メキシコ色が前面に出ざるをえない。研究者にしても、研究報告にあわせて強烈的な政治的アジェンションをおこない、それがまた聴衆の学生の熱い拍手をさそうのである。このような学会のありかたそのものが、メキシコ的と

いうほかない。

約2千600人が参加し、その半分以上が外国人だったとのことである。大会準備委員長をつとめたロドルフォ・スタベンハーゲン、グスタボ・エステバ、ルイサ・パレ、ウルスラ・オスワルド、ホルヘ・セラノなど、メキシコの社会・人類学者の活動がめだった。

なお最後に特筆しておくべきことは、金沢大学の二宮哲雄教授が国際農村社会学会の新副会長に、日本人としてはじめて推挙されたことである。「経済大国ニッポン」としては、やや気負いすぎとはいえメキシコの国際会議にたいする積極的姿勢にも少しは学び、学術面においてもっと国際的に進出してもよいのではなからうかと痛感した。

iii) 米・伯・墨での資料収集と専門家との会 見 三橋利光

2年ほど前から上智大学イベロアメリカ研究所主催で、「ラテンアメリカの社会階級に関する研究会—中産階級を中心として」という長い名称のついた研究グループが学内で月例研究会を重ねていましたが、本年度から私学振興会の財政的援助が受けられることになりました。その研究会で、私に、ブラジルを中心にして資料収集をして来るようにとの決定が5月末になされた時、私事にわたり恐縮ですが、私はこの決定を自分自身の取組んでいる研究のためにも有意義に発展させたいと考え、メキシコとブラジルにおける実証主義の研究者や関係者、また歴史家などに、是非お会いしたい旨の手紙を書き送り、そのほとんどから好意的な返事を受けることができました。

こうして、今夏、8月26日から9月30日までの36日間、ニューヨークを起点として、ブラジルではリオ、サン・パウロ、ポルト・アレグレに滞在した後、ブエノス・アイレスまで足を延ばしてから、メキシコ・シティとロス・アンジェルスを巡って、関係の学者たちから多くの示唆を得て、また200冊程の書籍を購入して、10月1日に帰国しました。

私の研究テーマに関して興味深かったことは、オーギュスト・コントの実証主義の研究それ自体に対する評価が分かれることでした。今回の旅行で最初にお会いしたニューヨーク

州立大学のウィリアム・D・ラート氏はコント実証主義を原書にあたって研究することの意義を強調していました。またリオの実証主義者教会の人々は、コントの信奉者である故、コントのブラジルへの影響を力説していたばかりでなく、現在も、熱心にその普及に努めている姿勢が印象的でした。またブラジルでは、精神生理学の臨床実験からコントの学説（情動の領域が知性の領域を支配する）を立証する研究が最近になって発表されたことを知り、またコントの人類教を日常生活で実践しているという老婦人の淡淡とした話に深い感動を覚えたりもしました。

メキシコのレオポルド・セア氏は、その著書から予測できたように、メキシコでの実証主義を中産階級のイデオロギー的表現にすぎないという、つき離れた見方をしていました。同氏からは、私の論文の構成上、貴重な御教示をいただき、また重要文献を一つ一つお宅の書齋で見せていただきました。UCLAのブラッドフォード・バーンズ氏も、その著書『ブラジル史』（1980年改訂版）に見られるように、ブラジルの実証主義の役割について限定的な役割をくり返していました。

また、さきのセア氏には、お宅に招かれた日の前日にも、UNAMの哲学・文学部での「ラテンアメリカ研究センター」（Centro Coordinador y Difusor de Estudios Latinoamericanos/CCYDEL）を訪れた折、他の教授たちを混じえてお会いしていました。その時に、私が日本にも「日本ラテンアメリカ学会」が本年6月に設立されたことを話しますと、センターのマリア・エレナ（Maria Elena Rodríguez Ozán）女史が、センターと学会との交流を図りたいとの意向を示し、これにセア氏も賛成の様子でした。

総じて、今回の旅行では予想以上の収穫が得られたと思っておりますが、出発前には「日本ラテンアメリカ学会」の諸先生からメキシコやブラジルで会うべき学者の住所や電話番号を教えていただき、また現地では米国をも含めて、一研究学徒にすぎない私をあたたかく迎えてくださり、お世話くださったことをあらためてここに感謝します。

iv) ラテンアメリカ文学研究への期待

野谷文昭

ある出版社の編集者によると、少なくとも文学に関する限り、ラテンアメリカを扱った書評の数が、ここ数年他を圧倒しているという。かつて、翻訳紹介されても、批評の対象となることがほとんどなかったことを思えば、格段の相違である。

ミストラル、アストゥリアス、ネルーダのようなノーベル賞作家が出るか、革命や人種問題との関連で扱われない限り、スペイン文学の一部とさえみなされてきたラテンアメリカ文学であるが、60年代の小説を中心とした世界的「ブーム」が日本にも押し寄せるに及んで、状況は一変してしまった。翻訳書とはいえ、文学史(白水社刊)が現れたことに象徴されるように、地域としてのラテンアメリカが意識されるようになったのである。

もっとも、この現象も、近年の我が国における構造主義や従属理論の一般化と、その種の理論を直接あるいは間接的に生み出す場となった第3世界としてのラテンアメリカに対する関心の高まりを抜きにしてはありえなかったろう。実際、現在の「ブーム」の中心となる作家たちの多くがそうした視点の持ち主であることは、このことを裏付けているといえよう。

だが、この情況を作り出す基盤となったのは、なんといっても全集の刊行であろう。特に、最近完結した国書刊行会全集は、画期的な企画であった。また集英社の世界文学全集がラテンアメリカ文学に多くの巻をあてたことや、『海』、『カイエ』等の雑誌による特集も見逃すことができない。これに拍車をかけたのが、昨年のバルガス＝ジョサ及びボルヘスの来日である。特に前者は、ラテンアメリカという地域を我が国の読者に強く意識させたといえよう。このような情況の中で、ガルシア＝マルケスの『百年の孤独』(新潮社刊)が再び注目され、バスの『孤独の迷路』(新世界社刊)の存在が広く知られるようになったことは記憶に新しい。さらに2年後には、集英社版のラテンアメリカ文学全集が刊行されることになった。

このように翻訳紹介が華々しく続く一方、研究情況の方はいまだしの観があることは否めない。研究者の不足とともに共同研究及び

発表の場に欠けていたことが、その大きな原因である。その意味でも、本学会の誕生は有意義といわねばなるまい。たとえば、これまで比較的交流の少なかったイスパノアメリカ文学研究者とブラジル文学研究者に、共通の場が与えられたわけである。さらに、多方面からのアプローチを可能とする作家(たとえばバス)や作品、運動などを、文学はもとより文化人類学、歴史学、社会学等の専門家が、本学会の理念に基き、学際的共同研究を行なうことも夢ではなくなった。いずれにせよ、本格的な研究はこれからであり、またそれだけに期待されるのである。

4. 55年度文部省科学研究費補助金を受けたラテンアメリカ地域関係課題一覧

[一般研究D]

- 「ラテンアメリカと日本の関係史にみられる文化的・経済的摩擦の研究」 国本伊代(中央大学)

[海外学術調査]

(1) 現地調査

- 「中部アンデス火山帯の地球化学的調査研究」(ペルー・チリ・アルゼンチン・アメリカ) 小沼直樹(筑波大学)他5名
- 「ボリビア国チャカルタヤ山(5,200m)での空気シャワー現象の測定調査」 俣野恒夫(埼玉大)他8名
- 「アンデス中部地域の中・中生界の生物層序学的研究」(ペルー・ボリビア) 坂上澄夫(千葉大)他7名
- 「淡水産・板鰓類の適応および系統進化に関する研究」(コロンビア・アメリカ・ペルー・ブラジル・アルゼンチン) 水江一弘(東京大)他5名
- 「ブラジル南部外国人移住地域における住文化変容に関する比較調査」 上田篤(大阪大)他6名
- 「南太平洋岸砂漠に出現する季節草原ロマスの生態と種分化に関する研究」(ペルー) 小野幹雄(東京都立大)他3名
- 「南米の哺乳類の進化に関する古生物学的研究」(ボリビア) 高井冬二(進化生物学研究所)他4名
- 「中部アンデスの地球物理学的調査」(ペルー・ボリビア・チリ) 河野長(東京大)

来年度大会について

日本ラテンアメリカ学会第2回大会は、1981年6月6日(土)および6月7日(日)の2日間(あるいは6月7日, 1日のみ), アジア経済研究所で開催する予定です。報告希望の有無, および統一テーマ, シンポジウムに関する提案を, 同封の葉書にご記入のうえ, 12月20日までにご返送ください。

他2名

(2) 調査総括

- 「南米ポリビア共和国アンデス地帯の多金属型熱水鉱床に関する地質学・鉱物学的調査」 荳木浅彦(東北大)他3名
- 「熱帯半乾燥地域における水文環境・生態系の風土病・農業的土地利用に関する研究」(ブラジル・ベネズエラ・メキシコ・アメリカ) 市川正巳他8名
- 「中南米, 特にペルーにおける肺吸虫症の病態生理学的研究」(ペルー) 横川宗雄(千葉大)他9名
- 「アンデス中部地域の古生物学的研究」(ペルー・ポリビア・チリ) 前田四郎(千葉大)他3名
- 「南アメリカ南部の後期中生及び新生代の化石植物相の研究」(チリ) 西田誠(千葉大)他4名
- 「第2次核アメリカ(中米・アンデス地区)調査」(ペルー・エクアドル) 寺田和夫(東京大)他6名
- 「南米大陸における広鼻猿類の系統・進化に関する研究」(ポリビア・ペルー・ブラジル・コロンビア) 近藤四郎(京都大)他9名
- 「南部メキシコ村落におけるカトリック系文化の研究」 野村鴨清(九州大)他6名
- 「南米熱帯地方における居住高度への適応」(ポリビア) 竹本泰一郎(長崎大)他6名
- 「ムカシウサギ亜科の生態学と宿主寄生虫体を指標とした系統発生学的研究」(ケニヤ・メキシコ) 鈴木博(長崎大)他3名
- 「南米における沖縄県出身移民に関する地理学的研究」(ペルー・アルゼンチン・ブラジル) 田里友哲(琉球大)他4名
- 「熱帯アンデスの氷河と内陸湖の変動に現われた気候変動の研究」(ペルー・ポリビア・アルゼンチン・チリ) 野上道男(東京都立大)他3名

5. 事務局から

- 第1回定例研究会のお知らせ

東日本部会

日時 1980年11月15日(土) 午後2時~4時半

場所 アジア経済研究所(東京都新宿区市ヶ谷本村町42)役員会議室

テーマおよび報告者

1. アルゼンチンの労働運動とペロニズムの形成(1930~1945)
松下洋氏(南山大学)
2. アルゼンチンの1837年の世代——イスパノ・アメリカにおける政治的ロマン主義の一例として——
松下マルタ氏(南山大学)
(2はスペイン語で報告します)

東日本部会についてのお問い合わせは、
アジア経済研究所 石井章(電話03-353-4231-内線318)まで

西日本部会

日時 12月6日(土)午後1時半~5時

場所 大阪市立大学(大阪市住吉区杉本町・国鉄阪和線杉本町下車3分)

テーマおよび報告者

1. ラテンアメリカにおける民族学の現状 友枝啓泰(民族学博物館)
2. ラテンアメリカ文学におけるナショナルリズム(仮題) 吉田秀太郎(大阪外語大)
3. マリアテギにおけるインディヘニズムとマルクス主義の合流 原田金一郎(大阪経法大)

No. 2 1980年11月1日発行
日本ラテンアメリカ学会事務局
〒153 東京都目黒区駒場3-8-1
東京大学教養学部第8本館
中南米分科気付
☎(467) 1171 内線581